

千葉の園芸

発行所 千葉市中央区市場町1-1
公益社団法人千葉県園芸協会
連絡先 043(223)3005
発行日 毎月1日
令和7年12月号

トルコギキョウ斑点病の発生生態と防除対策

千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所
生産環境研究室 主任上席研究員 鐘ヶ江 良彦

トルコギキョウ斑点病は、千葉県では2018年に多発して大きな被害をもたらしました。斑点病の発生生態をもとに、薬剤を活用した適時の防除対策の考え方を紹介します。

1. トルコギキョウ斑点病とは

トルコギキョウ斑点病（以下、本病）は、糸状菌（カビ）の一種シュードサークス・ネフェロイデスが引き起こす病気で、2008年に国内で初めて発生し、千葉県では2018年に発生した比較的新しい病気です。本病に感染すると、まず、黄色の退緑斑が葉に発生し、その後、黒褐色のすす状の病斑となります（写真1）。

トルコギキョウ栽培は密植で、生育後半は茎葉が繁茂して薬剤が効かなくなるため、本病が発生してからの防除が難しく、切花の商品価値を低下させるなど大きな被害を発生させています。



写真1 トルコギキョウ斑点病のすす状の病斑

2. トルコギキョウ斑点病の接種から発病までの日数と被害の出やすい作型

トルコギキョウ栽培温室で本病菌を接種し、発病までにかかる日数を調査しました。その結果、南房総地域のトルコギキョウ主力作型である普通栽培（初夏に収穫）では、4月は23日、5月は20日、6月は16日程度であり、ほ場の気温が高いほど発病が早くなりました（図1）。抑制栽培（秋に収穫）では、9月は14～22日、10月は22～28日であり、普通栽培と同様気温が高いほど発病が早くなりました。現地の発病を調査したところ、本病の発生は、抑制栽培よりも普通栽培で多いことがわかりました。普通栽培では、生育後半の高温期に茎葉が繁茂することから、本病の発生リスクが高くなります。

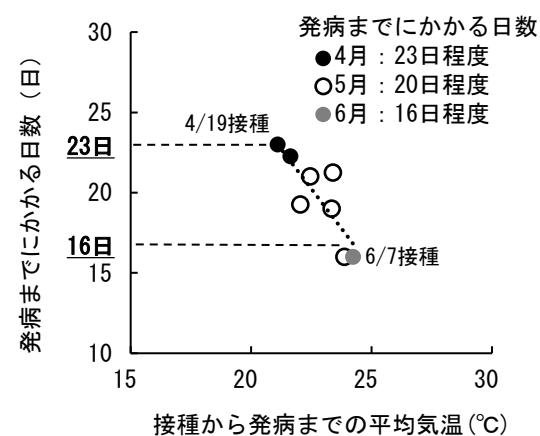


図1 トルコギキョウ斑点病の接種時期ごとの接種から発病までにかかる日数

3. トルコギキョウ斑点病の薬剤防除の考え方

本病は新しい病害であるため、本県で発生した当初は使用できる薬剤が少なく防除手段が限られていきましたが、現在は農薬の適用拡大が進み、数種の薬剤を選択できます。本病の防除は、①発病する前の防除を心掛け、定植直後から防除を開始する、②ハウス内の気温が高いほど早く発病するため、防除の間隔は、普通栽培で3～4月は23日、5月は20日、6月は16日を、抑制栽培で9月は14～22日、10月以降は22～28日を目安に考える、③普通栽培で特に注意して防除する、④薬剤耐性菌の発生を防ぐためにローテーション散布を行う、の4つのポイントが有効です。

4. おわりに

本病の発病歴のあるほ場では、本病菌を持ち越すことが考えられますので、上記①～④を徹底し、特に警戒しましょう。

これらの技術については、千葉県公式セミナーチャンネルで公開していますので、併せて御覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=2j8NtuhMg&t=2062s>





都市緑化と植木流通に関する研修会を開催しました

公益社団法人千葉県園芸協会
産地振興部 塩崎 桂司

千葉県園芸協会では県産植木の需要拡大の一環として、県の「ちばの植木生産拡大事業」を活用し都市緑化の現状把握と植木流通を学ぶため都内の再開発地域の見学と流通業者を訪問する研修会を開催しました。

1. はじめに

千葉県園芸協会では当協会種苗センター内に「生産者と実需者を結ぶ見本園」を開設し県産植木の需要拡大に努めているところです。これまで住宅メーカー等を招いた実需との交流を促進してきましたが、本年度は趣向を変え都心での緑化事業の動向と流通業者との意見交換を企画し、千葉県植木生産組合連合会員、「見本園」関係者、その他関係者25名の参加を得て、研修会を開催しました。

2. 都市緑化最前線

都市緑化の施工例として、民間企業体がグリーン・インフラ整備として取り組んでいる「大手町の森」周辺及びお台場エリアで展開されている「ナチュラリストティック・ガーデン」を中心に緑の使われ方を見学してきました。

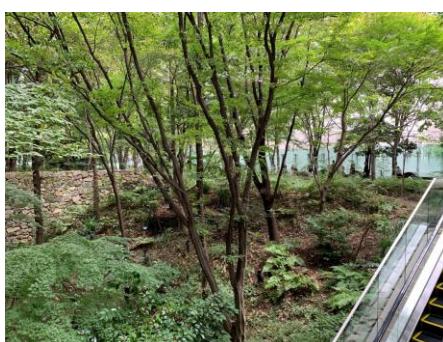
(1) 大手町の森とその周辺

Otemachi One Gardenは、「より豊かに、イノベーティブに、サステナブルに」をコンセプトに、憩う場・潤う場・賑わう場・働く場・思索する場として地域で働く方々が積極的に利用可能な場所として提供されています。緑・花・水が一体となり、季節や水の動きが感じられる空間に仕上がってきました。

大手町の森は、「都市を再生しながら、自然環境を再生する」の理念のもと、再開発された高層ビルの谷間を空間として利用し、地上部分に下草、低木及び高木が自然に配置され、森の中に入り込んだ感覚に陥る自然回帰を印象付ける森づくりでした。



Otemachi One Garden



大手町の森



ナチュラリストティック・ガーデン

(2) ナチュラリストティック・ガーデン

植物の自然な姿の変化を感じ、季節の移ろいなどを堪能できるガーデンがテーマで、宿根草やグラス類等を中心に、面として鑑賞するガーデンとなっています。ボランティアが管理する住民参加型の取組をされており、東京湾の埋立地に作られた素朴で自然が感じられるガーデンでした。

3. 花き市場での植木流通

緑化事業では需要の多様化・多品目化が進んだことから従来の植木市場では入手困難な植物は大手の花き市場に求める傾向が強くなっています。大田市場内のフラン・オークション・ジャパン（F A J）では都市部の再開発やグリーンイベントに関連する需要が一定量あり、商品と利用者をつなぐ取組を強化していきたいとのことでした。具体的には生産者ごとの商品リストの作成・収集や取引情報の提案、中継基地としての利用等の提案がありました。最近の傾向として画像は商品の選択に欠かせない情報となっており、生産者、卸売業者ともに最新の整備が求められます。

4. おわりに

今回の研修会は都市緑化の最新の傾向を学ぶとともに、需要に即した生産に資することを目的に開催しました。持続可能な開発目標をキーワードに再開発が進められ多種多様な植物の需要が高まっていることが実感されました。また、需要をうまくキャッチするためには自らの生産物を視覚（画像）でも提案していく重要性が再認識されました。



丸朝園芸農協のサンダーソニア安定生産にむけた取組

千葉県山武農業事務所 改良普及課
普及技術員 石井 麻美

丸朝園芸農協では、地域を代表する主要花き品目『サンダーソニア』の安定生産を目指し、『自家養成球根』の生産技術改善や、産地間連携体制の構築など流通に関する新たな課題に、幅広く取り組んでいます。

1. サンダーソニアの生産について

丸朝園芸農協花卉部では、多様な切花を生産しており、主要品目のサンダーソニアは平成5年頃に栽培が開始されました。安定供給を目指して、球根の貯蔵・休眠打破技術等を取り入れ、周年生産技術を確立し、全国随一の産地となっています。地域を代表する園芸作物として定着したサンダーソニアですが、生産を維持するために、更なる栽培技術の改善や流通販売強化等の取組がされています。



サンダーソニア

2. 栽培技術の改善

サンダーソニアを導入した当時は、海外から球根を購入していました。しかし、後に球根の輸入が困難となり入手できなくなったことから、産地では、球根を再利用する「自家養成球根」や種子から球根を生産する「実生養成球根」の生産に取り組むようになりました。

球根養成は、フザリウム菌や白絹病菌等に由来する土壌病害により健全な球根の確保は難しいとされてきました。そこで、県試験研究機関と連携して、球根腐敗のメカニズムを解明し、対策技術を確立したことで、球根生産を効率よく行えるようになりました。



サンダーソニア球根養成ほ場の定期巡回

3. 流通販売強化

近年、夏季の高温により周年生産が難しく、組合のサンダーソニアの出荷時期は10月～6月となっています。一方、市場関係者からは通年でサンダーソニアが流通することを求められ、夏に冷涼な高冷地等の他産地との連携の必要性が出てきました。そこで、夏季を中心に出荷するJA道北なよろを訪問し、栽培技術や出荷時期に関する意見交換を通じて、リレー出荷体制を構築することができました。

4. 今後について

丸朝園芸農協では、販路拡大のため成田空港に隣接するメリットを活かした輸出強化にも取り組み始めています。また、地域イベントや直売会を開催し、地域住民との交流も深めています。生産と販売の両面から花き生産の安定化を図り、産地の活性化を目指しています。



千葉県育成ナシ品種「秋満月」の現地導入事例の紹介

千葉県農林水産部 手支援課

専門普及指導室 上席普及指導員 高橋 真秀

千葉県が育成したナシ品種の秋満月の苗木が配布されてから6年が経過しました。早期に苗木を導入した生産者のは場調査を行ったところ、秋満月の高い収量性や省力性が明らかになりました。

1. はじめに

千葉県が育成したナシ品種の秋満月は、大果で良食味の晩生品種です。令和元年より県内向けに苗木の販売が開始されており、現在の栽培面積は約9haと推計されています。そこで、令和元年に秋満月を導入した2戸の生産者に対して、収量性や栽培特性に関する聞き取り調査を行いましたので、その結果を紹介します。

2. 直売経営における導入事例（Aさん）

Aさんのナシの栽培面積は2haであり、直売経営を行っています。秋満月は、令和元年に慣行樹形及びジョイント樹形で導入し、一部では高接ぎも実施しており、現在の栽培面積は約10aです。

今年度、慣行樹形の4本主枝（植栽間隔：6.4m×6.4m、改植園、黒ボク土）の樹から推計した収量は約2.9t/10a、ジョイント樹形（株間1.8m×列間4m、新植園、黒ボク土）の樹から推計した収量は約5.2t/10aであり、いずれも高い収量性が確認されました。

Aさんからは、「摘果作業は幸水等の主要品種の摘果が終わった後の6月の1回のみで済む。みつ症が発生するが、早めの収穫でみつ症の重症化を避けられるので9月20日頃までには収穫している。貯蔵性も良いので少しづつ販売している。幸水と同時期に開花し、花が多いことから授粉樹としても優れている。樹勢が強いので樹冠の拡大も早い。」との感想を聞きました。



図1 ジョイント樹形の秋満月（7年生）

2. 市場出荷の経営における導入事例（Bさん）

Bさんのナシの栽培面積は1.8haであり、全量を市場出荷しています。秋満月は、令和元年に慣行樹形で導入し、現在の栽培面積は約10aです。

今年度、慣行樹形の4本主枝（植栽間隔：4.4m×4.3m、新植園、黒ボク土）の樹から推計した収量は約5.8t/10aであり、高い収量性が確認されました。

Bさんからは、「自家摘果性が有るので摘果は残ったところのみ実施しており、最終的な果実サイズは8～12玉になる。秋満月のみみつ症は、豊水と異なりうつすら入る程度で食感への影響が少ない。市場担当者とも情報共有し、食味評価を受けた上で全量を出荷している。樹勢が強く、着果負担をかけても樹勢が落ちない。葉が多いため日焼け果の発生も少ない。省力的に管理できるので、今後も栽培面積を増やす予定。」との感想を聞きました。Bさんの秋満月は、出荷先の市場からも「甘味が強く、酸味も少なく食べやすい。売り先のスーパーでの評判も高い。」と好評を得ています。



図2 4本主枝の秋満月（7年生）

3. まとめ

現地調査の結果、秋満月は、高い収量性が見込める品種であるとともに、省力的な管理が可能で、樹勢が強く早期に樹冠拡大が可能な品種であることが確認されました。また、みつ症の発生を減らすためには、食味を確認しながら採り遅れないように収穫することが有効と考えられました。今後も引き続き情報収集と発信を行い、秋満月の普及を進めています。



新梢緑枝接ぎによるニホンナシ苗木の育成技術

千葉県農林総合研究センター
果樹研究室 室長 押田 正義

長さ35cm程度に育成したホクシマメナシ及びニホンヤマナシの実生台木を4月に定植し、6月に緑枝部分から穂木を採取して接ぎ木することで、播種後2年間で長さ2m程度の苗木を育成できます。

1. はじめに

近年普及が進んでいる樹体ジョイント仕立てや2本主枝一文字仕立てなどの単純樹形による密植栽培では、優良な苗木が大量に必要となります。しかし、県内には果樹苗木業者がいないため、苗木の安定供給に不安があります。苗木育成に関心を示す他の業者はいますが、通常の接ぎ木は適期が3月下旬から4月上旬と時期が限定されるため、参入をためらう一因になっています。

そこで、初夏から秋の生育期に接ぎ木できる緑枝接ぎの技術確立を目指し、活着率が高く新梢生育が良好となる接ぎ木時期を明らかにしましたので紹介します。

2. 緑枝接ぎとは

緑枝接ぎは、穂品種の新梢から穂木を調製し、台木の新梢に割り接ぎする接ぎ木法です(写真1)。ニホンナシの高接ぎにおける緑枝接ぎは6月下旬~8月が適期とされますが、苗木育成に利用された事例はほとんどありません。

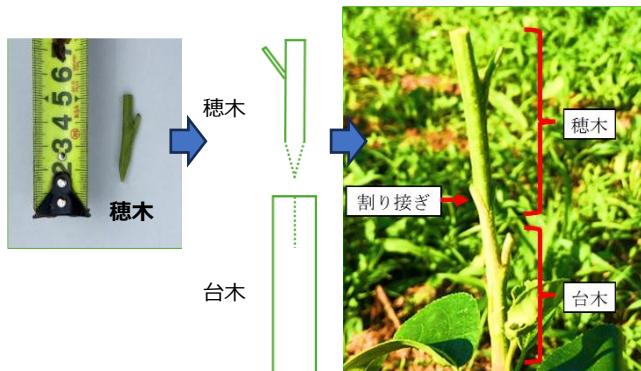


写真1 ニホンナシの緑枝接ぎ(割り接ぎ)

3. 緑枝接ぎの時期

12月にホクシマメナシ及びニホンヤマナシを25穴連結ポットに播種し、加温ハウスで育成した後、長さ35cm程度の実生を翌年4月上旬に苗場に定植しました。「幸水」を穂品種として時期を変えて緑枝接ぎしたところ、6月及び9月の活着率が高くなりました(図1)。また、ホクシマメナシ台がニホンヤマナシ台より活着率が高い傾向がありました。

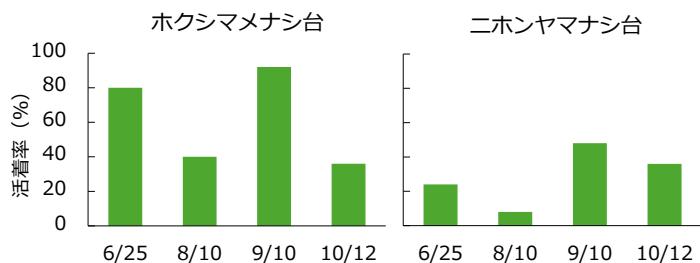


図1 ホクシマメナシ台及びニホンヤマナシ台への「幸水」緑枝接ぎの時期別活着率

緑枝接ぎから2年後には、いずれの台木でも長さ2m程度の苗木が育成できました。さらに、緑枝接ぎ3年後には主幹から発生する新梢数が平均3.4~4.5本、新梢長が平均65~156cmになり、主枝候補となる新梢が確保された苗木が育成できました(写真2)。なお、ホクシマメナシ台では接ぎ木時期による生育差は判然としませんでしたが、ニホンヤマナシ台は接ぎ木時期が早いほど生育が優れる傾向があったため、緑枝接ぎの時期は6月が最も適すると考えられました。



写真2 緑枝接ぎ3年後の「幸水」苗木

4. おわりに

以上から、長さ35cm程度に育成したホクシマメナシ及びニホンヤマナシの実生台木を4月に定植し、6月に緑枝接ぎすることで、播種後2年間で長さ2m程度の苗木を育成できました。この方法では、千葉県の慣行法より苗木育成期間が1年間短縮される利点もあるため、他業者のニホンナシ苗木育成への参入が促進されるものと期待されます。



第46回千葉県フラワーフェスティバル

千葉県農林水産部生産振興課

年に一度の“ちばの花の祭典”が開催されます。

会場には千葉県産の切花、鉢花、洋らんなどが展示されます。

ひと足早い春の訪れをお楽しみください。

1. 会期 令和8年1月16日(金)～18日(日)

2. 会場 (株)そごう・西武
そごう千葉店 6階催事場
(JR, 京成, 千葉モノレール「千葉駅」から徒歩1分)

3. 内容 花の品評会(出品点数約360点(予定))、
花やイチゴの販売、花の体験教室
品評会出品物の即売会(最終日)など

4. 問合せ 県庁農林水産部生産振興課
電話 043-223-2871



前回(第45回)チーバくんディスプレイ

募集案内



令和8年度農業者養成研修(前期)研修生募集

千葉県立農業大学校

県内で新たに就農する方や、既に就農している方を対象に
基礎的な農業知識・技術を習得する研修を開催しています。

1. 研修期間及び内容(令和8年度) :

- (1) 基礎研修: 4月8日(水)～6月30日(火)
・講義、農場実習(野菜・花きの栽培管理)、
プロジェクト実習等
- (2) 専門研修: 4月8日(水)～9月30日(水)
・基礎研修に加え、農家実習等
- (3) 部門別研修: 4月8日(水)～令和9年3月19日(金)
・専門研修に加え、農家・プロジェクト実習を継続

2. 応募受付期間 :

令和8年1月5日(月)～1月30日(金)(消印有効)



農場実習 スイカ整枝作業

3. 選考方法 :

書類審査、面接

4. 受講料 :

1か月 3,300円(教科書代等別途実費3万円程度が必要)

※詳細は農業大学校農業研修科まで
電話 0475(52)5140 FAX 0475(54)0630
<http://www.pref.chiba.lg.jp/noudai/>